

鼎談「二核的な同一主体の隔たりについて」

守章(守雅章＋守喜章)×岡村恵子

2019年10月6日〔日〕 会場 | 横浜市民ギャラリー4階アトリエ

守喜章(以下、Y) | なぜ岡村恵子さんにゲストとして来ていただいたかという、岡村さん企画の展覧会に出品したこともあるのですが、それ以前から関わりがあるからです。今日はそのこともお話ししたいと思います。

岡村 | 私が企画した展覧会「低温火傷」(東京都現代美術館)が2000年でしたね。私は学芸員を始めて25年になるのですが、「低温火傷」が実質ゼロから企画した初めての展覧会でした。ですので、今見ると若気の至り的な気恥ずかしさもあるのですが、今回の鼎談のために改めて昔の資料などを見ていて、とても気恥ずかしい部分と、スタート時のフレッシュな気持ちを思い出すことができ、いい機会をいただいたと思っています。守章のお二人にお会いしたのは1994年です。そのきっかけが、守章というユニットの成立に触れる時期になるので、そこからお話できるのではないかとということで、今回鼎談に呼んでいただいたのではないかとと思っています。

Y | 私は、現代美術ササエティ北九州(CASK)の「現代美術サマーセミナーIN北九州」に2回参加していて、1994年にアブラモヴィッチのクラス、1995年にジーヴェルディングのクラスに入りました。94年の時に、身体性についてのワークショップ、95年にビデオカメラを使ったワークショップをしました。その時のことが、守章の制作スタイルの大きなポイントになると思います。

岡村 | 守章は双子のユニットですが、当時はまだ別々に活動していましたよね。宮城県石巻の出身で、それぞれ東京に出て来られて別々の大学に進まれて、別々の生活をされながら、喜章さんはCASKのセミナーに参加されています。私も94年に参加しました。現在、CCA北九州と呼ばれている大学院レベルの現代美術の若手作家のためのスクールがありますが、その前身となる現代美術ササエティ北九州(CASK)で「現代美術サマーセミナー・イン・北九州」が1995年までおこなわれていました。今思い出してもとても贅沢な機会だったと思うのですが、ヨーロッパと直につながって、一線級のアーティストに来てもらって、密接に一緒に時間を過ごすことで作家としての突破口を見つけてもらうという内容でした。作家向けのプログラムでしたが、留学中に実技のクラスなども取っていたので

むりやり応募して参加しました。というのも、私は卒業論文でマリーナ・アブラモヴィッチとウーヴェ・ライジーベンという二人組の活動について中心的に扱って、それを書いたばかりでしたので、作家本人と近しく過ごせる機会というのはなかなかないので応募しました。そして同じクラスに喜章さんがいました。アブラモヴィッチは、今ではセレブ級のアーティストという感じですが、当時はまだそこまでセレブ扱いではなくて、美術における身体表現、パフォーマンスの領域での先駆的な仕事が知られていました。そしてウーライ(ウーヴェ・ライジーベン)というドイツのアーティストとの二人のユニットで、二人の関係性を主題とした制作をしていました。CASKの時はすでにユニットは解散していて、ソロでアブラモヴィッチが講師として来ていました。守章の作品を見ると、直接の薫陶を受けたからというわけではありませんが、比較してみると面白いところもあると思います。雅章さんは、94年のセミナーには参加していないのですが、連日マリーナと10人ぐらいのアーティストと一緒に過ごし、日に日に道場ようになっていました。日替わりのメニューがあって、最初に壁の前に椅子を置いて自分が対峙できる所に鏡を置いて自分を見つめなさい、何が見えてきましたかというエクササイズがありました。

Y | そして彼女が注いだ水を飲みなさいと言われて飲むと、何か変だなと思ったら金箔が入っているんですね。

岡村 | アブラモヴィッチには、ついて行ったら何かが起こりそうなカリスマ性がありましたね。今回、細かい資料まで引き出せなかったのですが、近隣の地図を広げて、目隠しをして地図の一箇所を指して、その場所に行って何かをしなさいといったエクササイズもありました。やみくもに地図を指して、何とかしてその地点に行って、そこで出会った最初の人を尾行しなさいと言って、その先何があっても責任を取らないと言われました。

Y | 尾行している人に気付かれたら身元をばらしてもいいけれど、それ以外はその方が新幹線に乗ったら付いて行きなさいと。

岡村 | 限界まで付いて行きなさいということなのですが、それをどこまで真面目に受け取るかはアーティストに任されていました。

色々なエクササイズを日々していくのですが、最後断食をして。

Y | 水だけを飲んで動きを制限された形で、1日ずっと一つの場所にいたんですね。それで夜寝ている時に通訳さんに一人一人起こされて、今思い浮かべたことを紙に書いてくださいと言われて書かされたんです。次の日になると、それを元にして明日までに作品を作っけなさいと言われて、書いた言葉を元にした作品を出品するという機会がありました。

岡村 | 意識、無意識の境目のような状態を生み出すことで、自分でコントロールして今までできなかったことに挑戦し作品を発表するというエクササイズだったと思います。実質的に喜章さんの作品を見せてもらったのは、CASKでの発表の時だったと思います。それまでのコミュニケーションやプレゼンテーションの中でも双子のお兄さんがいてその関係性が作品の主題だということは聞いていました。

Y | その時、私が書いた言葉は「光」だったんですね。それで光を元にして、2点作品をつくりました。そのうち1点は、一対の障子のロール紙を床に置いて、四つん這いで引き延ばしていつて、最後にピンで留めるといった作品でした。もう1点は、参加した受講生の岡山直之さんと場所がダブるので、アブラモヴィッチにもう1点作品をつくりなさいと言われて途方に暮れてつくりました。壁際に立った時に壁に影ができて、その影を自分で受け止めようと思い虫ピンで留めることにしました。でも自分の影を留めようとする動きでしまつて正確に取れないので、隣にいた女性がピンで打ってくれて作品になりました。ですので、自分の作品ではあるのですが、私は立っただけでした。

岡村 | 壁の前に喜章さんが立って、そのシルエットをピンで象ったという作品ですね。CASKに集まっていたメンバーは同世代のアーティストで、デビューしていた人もいるし、まだ模索中の人もありましたが、非常に密な時間を過ごしたので、一緒にグループショーをしたり、東京に戻ってからそれぞれの個展を見せてもらったりしていました。守章という名義で発表されるようになるのは1996年だったと思います。

Y | ジーヴェルディングのクラスでビデオを使ったワークショップをしたのですが、当時はビデオを使った作品に全く興味がありませんでした。けれど、ジーヴェルディングに、あなたはビデオが向いていると乗せられて、ビデオカメラを買いました。それから兄と一緒に制作するきっかけがあり、カメラを前にしてつくった作品が《AM》です。撮影するために広い部屋を探していたのですが、なかなか見つからなくて、画家のO JUNさん

のスタジオを借りました。O JUNさんには何をするか伝えていなかったのですが、O JUNさんの奥さんがスタジオに麦茶を持ってきてくれたのですが、私たちは素っ裸でいるから慌てたりして。

岡村 | 左右からそれぞれ二人が入ってきて背中合わせになってバランスを取っているのですが、支え合うことって結構大変なんですよ。私自身は双子ではないので、双子であるというだけでとても近い他者が常に小さい頃からいるということが創作につながる時の、欲望や衝動とは何なのかとずっと思っていました。双子だからといって誰でも常に相手のことを意識するとは限らないのですが。この時期相似形をなすといった作品が多くて。守章の作品には、まだ若い20代の頃に、一番近い他者としてそれを意識することから、もっと広い他者との関係性を考えるという一つの雛形が見えるような気がして魅了されたことを覚えています。ビデオでのインスタレーションが、日本の美術館の展示などではまだ簡単には成されることのなかった頃のことですね。

Y | 1997年から私は北九州に移住し、兄は東京にいて、離れて制作していました。その頃のお互いの生活が作品化したのが《AM(Close)》です。この作品は、東京と北九州の間でFAXと手紙でのやり取りをしていて、それを会場に展示しました。お互いの生身の体ではなく、またお互いの間にカメラが存在しないような形になり、二人に距離があったのでその間で起きたことを作品化しました。

岡村 | それまでも別々に住んでいたとはいえ東京で近く密に連絡を取って制作していたけれど、物理的に二人が離れて相似形ではなくなったんですね。

Y | そうですね。

Y | 私は北九炊飯という炊飯工場でバイトしていたのですが、その時に掃除をしていてホースの水が長靴の中に入ったんですね。その時に外側からは見えないのですが、内側はぐちゃつとして気持ち悪くて、その気持ち悪さを表現しようと思い長靴を水でいっぱいにした中に文字が浮いている状態をつくりました。兄からは、私の長靴の作品を見てインスパイアされた1本のビデオテープが送られてきました。

守雅章(以下、M) | 長靴の作品が、自分の内側の、外から見えない居心地の悪さのようなものを表わしていると思ったので、そのオブセッションとして何ができるか考えました。そして延々とうがいをしているビデオ作品をつくりました。最終的には泡だらけになって、泡を吹いて終わります。展示では、この映像をループで流しました。

Y | これは何テイクぐらい撮ったのですか。

M | 10テイクくらいですね。1テイク目が一番良かったです。

岡村 | 非常に近くてお互いを熟知し合っている双子の間のコミュニケーションが、守章の根幹にあって、それが作品の強い部分でもあり、入りに難しい部分でもあると思います。ただ身体的な感覚として他者を意識して、それをどう視覚化、外在化していくかということが作品の大きな主題だったと思います。これらの作品を発表する機会に見せていただいていたので、私が初めて企画した第2回目のMOTアニュアル「低温火傷」に、6組の作家のうちの1組として選ばせていただきました。MOTアニュアルは、現在も継続して開催されていますが、当時はそのあり方も模索中で、私はテーマ的な展示をやりたいと思い、「低温火傷」の時代と言い切ることから日常の中の違和感のようなことをキーワードにして展示構成しました。守章のセクションでは、先ず出発点となったビデオ作品《AM》を展示したのですが、この時に二人から左右に何も無い空間をつくって欲しいと言われました。二人が正面から入ってくるのですが、背中合わせで支え合っていた二人が、崩れると左右に消えていくんですね。その消えていった先に何も無い黒い部屋があり、何かあるだろうと思ってそれぞれの部屋に入っても空虚な空間があるという展示をしました。

Y | 《AM(www.bekkoame.ne.jp/i/ga2750/lectures2.html)》、《AM(Siren)》では、全く何も無い空間と音だけの展示室をつくりました。

M | 人が展示室に入ってくると音が鳴るような作品です。

岡村 | 展示室に行って、こっちに作品があるらしいと思って入ると真っ暗で、センサーが反応して鳴る音を聞くという作品です。音だけの作品として出したのはこの時が初めてですね。

M/Y | そうです。

M | 展示には「サウンド・オブ・サイレンス」の詩の一節があるのですが、この曲が流れているというのは一切カタログには書いていないですね。

岡村 | 一応部分的にJASRACの手続きはしていましたよ。その他にヘッドホンで聴く作品…。

Y | 現在は福岡を拠点に活動している* CANDY FACTORY PROJECTというグループと、当時北九州で接して彼らと一

緒につくった作品を展示しました。

岡村 | 「低温火傷」では中村政人さんのコンビニとマクドナルドの作品ですか。

Y | 中村政人さんは、本当は一戸建て住宅を建てたかったんですね。

岡村 | この展覧会の後実現されましたけど、戸建ての住宅のパターンみたいなものに注目されて美術館のアトリウムに一戸建てを建てようとしていたのですが、若気の至りで実現できませんでした。

Y | 基礎が打てないという。

岡村 | 建物を原状復帰しないといけないので。2000年はバブルの崩壊というけれど、まだそこまで世界は破綻していなかったし、むしろ癒しといったことが多くの企画のキーワードになっていました。私は、豊かなのですが、生きづらさが意識されている人と自覚的でない人との落差が激しいような感覚を展覧会で出したかったんですね。その時、守章の二人が持っている他者を近しく意識しながら、孤独な部分もあったりするような関係性の暗闇の部分に惹かれていました。

M | ホンマタカシさんの展示は最後の部屋でしたよね。そこに置いてあったテーブルに来場者の方が自由に書いていいノートがありましたよね。

岡村 | SNSがない時代だったので、来場者のコメントがそこにいっぱい書かれていました。

M | コピーを取ってもらったのですが膨大な量ですね。

岡村 | どう出していいかわからないような言葉が噴出したノートになっていて、不思議な経験でした。ディストピア的なイメージが世の中にあまり出て来ないことに気持ち悪さがあったので、「低温火傷」というテーマで展覧会を開催したのですが、今考えると作品にそういう色を付けてしまう企画でもあったので、やってみて、展覧会には色々なあり方が必要だと思いました。自殺をする人が最後に見たであろう風景という平川典俊さんの作品が展覧会の冒頭にあったり、今日会場に来てくださっている木村太陽さんの作品も展示していました。

Y | 出品作家の中でテーマにぴったり合っていたのは、太陽さんだったように思います。

岡村 | そうかもしれませんね。

M | 毎週末、展示室の箱の中でパフォーマンスをしていましたよね。

岡村 | 箱の中に太陽さんがいて、箱上の穴を覗き込むと口の中が見えて何かもぞもぞしていたりして、喉が渴いたとか言われてお茶を注いであげるという。

Y | この展示はすごい冒険ですね。美術館でここまでできるって。

岡村 | 太陽さんがすごい冒険されていました。でもそういう切実さのようなものが、展覧会からひりひりと伝わってくる、そこで観客も動くといったことを目指していたと思います。「低温火傷」の後、守章の活動を付かず離れず観察はしていたのですが、音の作品へと展開されていきましたよね。

Y | 山口県の秋吉台国際芸術村で3か月間滞在制作をして、お互いの顔や体という身体性がなくなり、ある部分についての音による最初の作品をつくりました。《Nick》という作品です。今年のリボン・アートフェスティバルに出品した作品でもあります。

M | 小学校の総合的な学習の授業を使って、習字会をして「みんな」という文字を楷書しました。

Y | 山口県の有名な歌人・金子みすゞの作品から文字を選びました。

M | 習字会は、半紙を二枚並べた繋ぎ目を中心に見立て、二枚に跨って書いていくのですが、一枚一枚に別の人が書いた字が入り、参加者は他人の書いた文字を感じながら書いていきます。最終的に最初に書いた人の紙の余白に書き合わせて完了するのですが、概念としてループする形です。

岡村 | 具体的な他者の方々と一緒に作業するような、もしくはインストラクションして作業していただくような作品ですね。

Y | この作品に入っている音は、チャイムの音を逆回転させています。チャイムが鳴って授業が始まるのですが、その中で彼らの関係性が始まるもっと前の段階を目指そうと思って、逆回転再生したチャイムを使ってみました。

M | 因みにこれは2001年に撮影したので、写っている人たちは当時小学校5、6年生だったけれど、今31歳くらいになっていますね。

岡村 | この頃、喜章さんに何をしているか聞いた時、リサーチに行っているとおっしゃっていて。全国各地の防災無線から17時頃になると流れる音楽を、その場所に行って録音されていた。それはどれくらいおこなっていたか。

Y | 100箇所くらい行きました。山口県の時は、秋吉台国際芸術村で3か月間滞在した後にもう一度行って山口県版を収録しました。それから鳥取県版も収録しました。それ以外は、政令指定都市になった新潟市や相模原市に行ったりしましたが、日本の市区町村全て(1,741)は未だ行っていないです。

岡村 | もう少し詳しく言うと、だんだん二人が物理的に一緒にいなくなり、双子のユニットというものが実体的には兄がいない状況で弟がやっているという形になっていて、その中で防災無線の取材だけが続いているということが割と長かったと思います。

Y | 終日シリーズは、2001年頃から始めました。

岡村 | 終日シリーズは、実質的には二人で一緒につくっていないですね。

Y | 二人での制作は、2010年に今回展示している数をかぞえる作品《AM(273)》を制作して一時途絶えました。

M | その前に、「低温火傷」で展示した「サウンド・オブ・サイレンス」をモチーフにした作品の一節をループで聞かせる作品をやり始めましたが、二人ともエクササイズ的にやっているところがありました。

岡村 | ユニットでの活動が実質的に中断されるのは2010年ですね。

Y | 2012年3月11日に遊工房アートスペースで、一台の路線バスを貸し切り、私の知り合いや遊工房のメーリングリストから人を募って、職場や自宅から一人一人ピックアップして遊工房に届けるというプロジェクト「終日二十三区」をおこないました。

岡村 | このプロジェクトは震災の1年後ですね。今回の展覧会には、震災に関わりのあった方が他にも出品されていますが、お二人の出身地の石巻は大変な状況で、過去の出品作品も流されてしまったんですね。

Y | 些細な物でも替えがきかない物があると思いました。

M | 今年のリボン・アートフェスティバルに出品している作

品も2001年に制作した時はパネルだったのですが、震災で全部流されてしまったので再制作しました。終日シリーズは、震災の前から制作していた作品ですが、実際に震災が起こって、今まで録りためていた防災無線を外に出すことに対して躊躇するところがあったと思います。1年後の「終日二十三区」を開催してどういった気持ちでしたか。

Y | 実家に帰省するには、震災前は電車を利用していたのですが、震災で線路が分断されてバスでしか行けない状況でした。遊工房へも主にバスで行っていたので、東京で、バスを使って3月11日にイベントするということを考えました。バスの中では、ピックアップした場所、例えば中野区だったら中野区の防災無線が流れるような形にしていました。そしてバスの車内音響を、スカイプで会場にいる人につなぐ体制をつくりました。

M | 最終的に着いたらアートスペースでは何をしたのですか。

Y | 車座になって話をしました。今回の出品作品についてお話ししたいと思います。今回出品している作品を初めて展示したのは、2018年に釧路市立美術館で開催した富田俊明さんとの二人展（『Path-Artの仲間たち 富田俊明×守章 リップ・ヴァン・ウインクルからの手紙』）ですが、その時と展示の状況は全く違います。釧路では一つの展示室に2点展示したので、ワイヤレスヘッドホンで音を聞くような形でした。今回は独立した展示室をそれぞれ使わせてもらえたので、《AM(273)》は超指向性スピーカーという絞られた空間でしか音を聞くことができない機器を使いました。もう一つの《AM(Dayzzz)》は、二人で一緒に制作に向き合うということをしていなかったで、無意識的なものを取り上げる中で何かできないかということでICレコーダーを使い、先ず兄のいびきを収録し、そこに私の家の生活音を組み合わせでつくった作品です。

M | 《AM(Dayzzz)》は、収録した音をプロの録音技師さんをお願いして編集したのですが、いびきと生活音という異なる音源がひとつのリズムになって展示室にインストールすることができたと思います。

Y | 録音技師さんに二つの音源を一緒に組合せてもらう前に自分でやってみたんですね。でもやはり圧倒的に違うのは、一つ一つの音源のノイズを取るような下ごしらえをして、音のタイミングを合わせることをしていく技術力でした。本職の人にはかなわないことがわかりました。ですので、ある程度やりたいことが通じる方がいるのならば、全部自分でやる必要はないと感じました。

M | 《AM(Dayzzz)》は私と弟と録音技師さんとのチームでできた成果だと思っています。

岡村 | コンセプト的には機械で録ったそれぞれの音の応酬のような感じですが、加工するという手が加わっているんですね。

Y | 体から出てくる寝息やいびきの方が強いんですね。だから生活音と一緒にすると消されてしまうんです。そののせめぎ合いで作品として聞かせるものにしないといけないということを、この作品で学びました。

岡村 | シャッターに映像を投影していて、無機質というのとも違いますが、ホワイトキューブだとまた異なる印象を受けると感じました。

Y | 投影した文章の内容も読み難いと思います。編集して読み易くすることも検討したのですが、ユニットでの活動を再生してどぎまぎした状態というものが文章の端々にでているので、そのまま採用しました。また投影する時もフラットな壁よりも、シャッターのように凹凸がある所で少し読み難い状態で投影した方がよいと思いました。

岡村 | アーティストユニットって、兄弟の方もいますが、前提として他者同士であり、ユニットというフレームの設計から意識的におこなわれることが多いと思います。守章の場合は、二人の関係性が割と頻繁に揺らいでいて、外からの声掛けがあったということもありますが決裂後に再結成しています。その常に意識して逃げられない兄弟や家族という関係性、そして作家としての関係性、つまり身近だけど他者としての関係性が、作品のアイデンティティにどう入ってきているのかが掴み難いところが面白いのですが、それについてどう考えているのかお聞きたいです。

Y | 北九州にいた頃、色々な作家のプレゼンテーションを聞いているとすごく明快なんですね。自分がその明快さを獲得できないもどかしさ、葛藤は当時ありました。ただ震災で作品を失い、生きていることを前提に作品をつくるようになると、アーティストとしての立場や見せ方以外にも何か見出そうとしているところがあります。あまり恰好はつけられないところがあるところがあると思います。

岡村 | アブラモヴィッチとウーライ(ウーヴェ・ライジーベン)の話に戻りますが、最初二人は運命的な出会いを経て寝食を共にした時期があります。自立した作家としてお互いがスパークするような戦いがある一方、男女間では蜜月になってその後散り散りになりました。未だアブラモヴィッチと、若い奥さんと新しい生活を始めたウーライとみたいな時期だったので、作品に人生がオーバーラップしている、その生々しさと、二人が若かった頃のコンセプチュアルな形がはっきりしている時期との落差とか、作家・作品としての恰好よさ、恰好悪さとか、人生は続いていつて、裁判したり和解したりして、アートと人生の間を行ったり来た

りしながら続くところに魅力があつて。作家として良い時期と悪い時期、面白い時期と面白くない時期があると思います。双子のユニットとして、そのことを売りにすることはある種ネタとしては最強ですよ。相似形のプレゼンテーションはとても強かったです。守章は、そこからどんどん離れていきましたが、一貫性があつたりプレゼンテーションがうまくつたりする人とは違うところで続いているところがあると思います。お二人にもわかっていない部分もあると思うのですが、そこが一番大事なところで、かつそこをどう読み解くかが守章の作品の成立を左右すると思います。

Y | 今回の展示はすごくいい機会だったんですね。ですので、次の作品が大事になってくるというのは、身にしみて感じています。ここで、今回展示している作品の制作時に大きな影響を受けた文章を読み上げたいと思います。福岡出身の作家、夢野久作の『ビルディング』です。

(朗読)

岡村 | ありがとうございます。「対話のあとさき」に因み、残りの時間は参加者の皆さんと対話ができたらと思います。

質問者A | 夢野久作の作品は、ドッベルゲンガーに近い感覚だと思います。双子であるということが自己の認識、いわゆる自我ができる時に、一般の人だったら例えば自分の姿が鏡に映る時にそれが自分だと認識すると思うのですが、そういう意思とは関係なしに自分と全く同じ似姿の人が日常で歩いているという感覚はどういう感じなのでしょう。そしてそれが作品に対してどのように影響を及ぼしているのでしょうか。双子というのは、マイノリティ的な立場にある、そしてアーティストとしての特権にもなると思うのですが、二人で制作することはマジョリティ的な意味もあると思います。あと、ほぼ同時に生まれてきたのに一方は兄、一方は弟と呼ばれる、つまり属性が付けれられてしまうということの問題、社会的な補償の依り方なども含めて、作品にどういう影響があるのかお聞きたいです。

Y | 小さい頃は二人とも本当にそっくりで、同じ色の服を着せられていて、写真を見るとどちらが自分かわからなかったりしました。小学生の時に友人に、街で会ったのに無視されたと言われたことがあったのですが、私は街を歩いていないしその人に会ってなくて、実際に街にいたのは兄だったんです。そういうことがよくありました。ある時、いたずらで兄の専門学校の授業を受けたことがあったのですが、誰も気づきませんでした。

質問者A | 自己と他者の世界みたいなものが変化するような

感じはなかったですか。

Y | そういうことを無意識的に面白がっていたところはあると思います。

M | 二人の距離感は、別の他者とは異なる、違うということを自覚することはあります。

質問者A | 中学生の頃に自分で鏡を見た時に、自分ではないような違和感を持ったことがありました。自分一人でもそういった感覚がある時に、双子で自分の意思に関わらず、近くに似たような人がいるという感覚はどんな感じがするのだろうということがとても興味深いです。

Y | 生活している環境が変わると、考え方も体型も変わってきて、それはユニットとして物悲しいところもありました。けれど今は、離れた所でユニットでの作品をつくることは一つのチャンスでもあると思っています。兄弟の属性ですが、親は兄に責任を押し付けるところはありました。

M | 実家が商売をしていたこともあると思います。

岡村 | お二人の関係を見ている限りにおいては、兄だから、弟だからという上下関係はないと思うのですが、どちらかという兄の方が自由で、弟の方が帳尻を合わせているような印象があります。今はわかりませんが、守章のユニットが結成された当時は、アーティストとして自己の同一性のようなものをある程度自覚的に図らなければいけない時に、否応なく自分の一部にある傍の存在を抜きに創作活動ができないところから出てくる面白さというか、不思議さがある種の魅力だったと思います。ドッベルゲンガーというキーワードは、二人の主題を考える時に引き合いに出せるものだと思うのですが、同時にビデオカメラや録音機材などの機械を使ったもう一人の自分のイメージ、鏡を見た時の違和感もありますが、写真を撮られた時の違和感にも通じるところがあると思います。

M | 音でもビデオでも、作品において言葉や動作を繰り返すことも何か関係しているかもしれません。

Y | 今回の展示で使っている超指向性スピーカーは、スポットに入った人にだけ音が聞こえるような形で調整していたのですが、最終的に反響して色々な所から多角的に音が聞こえる状態の方が自分たちらしいと感じました。

岡村 | 過去の作品をご存知の方も会場にいらっしゃっていま

す。平野到さんいかがですか。

平野到さん | 私も、90年代の守章のお二人をよく知っています。今二人の体型はだいぶ変わっていますが、90年代前半はほとんど同じでした。ただ声は若干違っていて。私の印象としては、二人の制作スタイルは最初から違っていったような気がします。最初のビデオ作品、背中を合わせてバランスを取っている映像は素晴らしいと思いました。守章の要素が詰まっていると同時に、身体論的なところでも非常に面白くて。あのビデオを見ている限りでは、共存関係が見えるような気がするのですが、二人と話していた感じからは相当考え方が違う、あるいは何かに対してコメントする時も開きがある。その開きがあるからこそ、面白い制作が持続できているのではないかと思います。全く同じだと何も起こらないと思うので。今後もおそらく体型もパーソナリティも含めて、色々開きが出てくると思いますので、それを調整しながら生み出される作品は面白いものになっていくのではないかと思います。

Y | 平野さんは、海外での初めての展覧会の機会をつくってくださった方です。

M | 年齢を重ねる毎に二人の考え方もそれぞれ変わっていきませんが、どこが変わったのかというところにお互い自覚的になりながら、制作していくことになるとは思っています。

平野: 今回の展示を見て、息や声など身体が一番ミニマムな部分、つまり身体の最も原初的なものへの関心は活動初期から持続している気がするのですが、その関心から作品をつくりだそうと意識はされていますか。

Y | 震災で作品を失ったことで、物ではなくお互いの存在に向き合うということを突き詰めていくと、体から出てくるものとかが、生きているという存在そのものを受け止めたいという衝動がありました。

M | 東京に来る時は、弟の部屋に泊まるのですが、《AM (Dayzzz)》は私のいびきがうるさくて仕方ないというところから始まったりしているんですけどね。

質問者B | 《AM (Dayzzz)》は、怪獣など大きな獣のお腹の中にいるような印象を受けました。現代美術の受け取り方がわからなくて勝手に想像していたのですが、どう意図されてつくられたのかお聞きしたいです。

Y | 夢野久作の部屋そのものを人体化、人格化させるような設定が最初に浮かびました。部屋が語りかけるというか、そこに鑑賞者が取り込まれるような形が目論見としてありました。

M | スピーカーは1つで十分なところ、4つも使っているのだからかなり大きな音ですが、効果的に胎動のようなものを空間につくるためにセッティングしました。

木村太陽さん: 今日の鼎談でのプレゼンテーションが、「低温火傷」の少し後から防災無線のシリーズの作品へと飛び過ぎてしまっていたので、その間に制作された作品も岡村さんにも見てもらったらよかったのではないかと思います。わかり難いところもあるけれど、数をこなしてみるとそんなにわかり難いものでもないと思います。

Y | 今回の鼎談の大きな流れとして、ユニットの結成前、結成からの決裂、再生がポイントだったので、ここで紹介する作品は絞りました。

岡村 | 今日の参加者の方がどうお聞きになっているか探りながら話していたので、「わかり難い」という言葉を使ってしまいました。この鼎談で何を見せるかは守章お二人のチョイスでしたが、二人があまり見せられていないところに期待してもらう意味では紹介すべきだったかなと思います。ただ、双子フォーカスから制作がどんどん離れていった時期の面白さまで含めると時間が足りないですし、今回はもう一度二人で制作するということを考える場だと思いました。

Y | 今回の展示は、ユニットの決裂と再生のエッセンスのようなもののみで、その間の説明がない形なので取っ掛かり難いということはあると思います。でもそれくらい取っ散らかった、ユニットのものがきがあるので、あえてそこは単純化しているところがあります。私たちにとって今回の出品は、とてもいいきっかけになったと思います。

岡村 | 悩ましいところですよ。何も言わずに受け取って欲しいけれど、説明がないとわからないこともあると思います。その意味では今回、作品とは別の空間で二人のバックグラウンドを共有するインタビュー動画を見る場が設けられていて、見たい人は見るし、作品のみを見る人もいるという環境がありました。

Y | 今回、出品作品以外に二人の決裂から再生までがわかるインタビュー動画を収録してもらったことは、とてもよかったと思います。これから、次の作品を考えていきたいと思います。

M | 今後は、アートドラッグセンターという、アーティストの有馬かおるさんと一緒にリボン・アートフェスティバルの会場に仕立てたスペースがあるのですが、そこで色々な催しをしていく予定です。